

芥川龍之介・肉親への愛憎

安原可保里

(一) 実母フクへの仲間意識と同情

芥川龍之介の実母・新原フクは、明治十六(一八八三)年十二月二十五日、新原敏三と結婚した。ハツ・ヒサ・龍之介の三子を儲けたが、ハツは七歳で夭折してしまう。又、龍之介は、敏三が四十三歳の後厄、フクが三十三歳の太厄に生まれた子であったため、形式上ではあるが捨児にしなければならなかった。

母親にとってつらい思いをしなければならなかったのである。夫の敏三の激しい性格や女性関係も内気で小心なフクに心労を与えたと思像される。

ついに、フクは明治二十五年十月二十五日(龍之介生後七ヵ月旦)に発病(発狂)し、以後廃人同様の生活を余儀なくされる所となる。龍之介は実家の芥川家に預けられ、代わりに妹のフユが家事手伝いとして、新原家へ入る。そして、フクの存命中であるのに敏三との間に得一(芥川龍之介の異母弟)が生まれてしまうのである。

こうしてふり返ると、フクの人生(晩年)は、幸せとは言えないであろう。このような薄幸の母を龍之介は、どのように見ていたのだろうか。

芥川は、表面上は母に対する反感を示している。

芥川晩年の自伝的作品である『点鬼簿』(大正十五年十月一日発行『改造』掲載)の中に「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。」とあるのはあまりにも有名である。実母が狂人であったことが芥川の人生に影をおとしたことは事実で、狂気の遺伝に対する恐れから母にマイナス感情を抱いていたと十分に推測できる。

しかし、芥川は母に対する愛慕の情も(当然のことながら)作品中に匂わせている。

冒頭で「母に親しみを感じたことはない」と母へのマイナス感情を示した『点鬼簿』でさえ、後の方に母の命日と戒名はしっかりと覚えていと母への思いを匂わせているのである。

一応、その部分を引用しておくことにする。

僕の母の命日は十一月二十八日である。又戒名は歸命院妙乘日進大姉である。僕はその癖僕の實父の命日や戒名を覚えてゐない。

さて、私はここで芥川の母に対する感情に「仲間意識」があったのではないか、ということ指摘したい。

「仲間意識」とは、つまり、母と自分を同質の人間と認めていたのではないかということである。先に挙げた「点鬼簿」の引用にも母の命日と戒名は覚えていても父のは覚えていないとある。

ここに、母へのいたわりと、母を苦しめたであろう父への反感が感じとれるのである。

では、芥川とフクを結ぶもの（同質の者とするカテゴリー）は何であろうか。

それは、「狂気」である。

芥川が狂気の遺伝に恐れを抱いていたことは遺作「歯車」にあらわれている。

——僕は又椅子から立ち上り、發狂することを恐れながら、僕の部屋へ歸ることにした。（五赤光）

はっきりと發狂の恐れを書いた上で、しかもそれが遺伝的なものと読みとれるのは、右の引用より前の部分の級友と出会い立話する部分に

「だつて君も不眠症だつて言ふぢやないか？不眠症は危険だぜ。……」……略

「氣違ひの息子には當り前だ。」（四まだ？）

とあるからである。この他、更に詳細な読みが可能であろうが、今回はただ、芥川には狂気の遺伝を恐れる事実があったことを述べるにとどめる。

芥川とフクは、共に「狂人」（芥川自身、「狂人」そのものでなく、その可能性のある者ということになるが）である。

このことは、芥川に強い近親憎惡の念を母に対して抱く結果になつたであろう。

だが、それだけ結びつき（芥川の一方的な思い）フクは芥川が十歳の明治三十五年に他界をしたので——である。——も強かつたのではないだろうか。

又、「狂人」というものの捉え方も問題になつてくるであろう。

晩年において芥川の「狂人」の捉え方は否定的なものが大部分であるが、初・中期のそれは、必ずしも否定的なものではないのである。

芥川は、早くから「狂気」へ関心を示していた。（このことは、母フクのことから当然と言えよう。）

「狂人」を描いた初・中期の作品には、主なものとして、「忠義」「二つの手紙」「疑惑」「奇怪な再会」がある。これら全作品の説明をしていると今は煩雑なことになるので、乱暴かもしれないが、一言で説明しよう。

これらの作品中の「狂人」の共通点は、ある真実を認識して

(氣づいて) いるため、その真実を見抜けない周囲の人々によって迫害され「狂氣」へ追いこまれていくという点である。全部の作品を取りあげたいが、紙面の都合上、今回は、母との関係が最も色濃くあらわれる「忠義」に絞って話を進めていこうと思う。

「忠義」は大正六年三月に「黒潮」に発表された。

主人公・板倉家当主・修理が病後の神経衰弱に苦しみ、周囲の無理解のため孤立し狂気へ追いつたてられてゆく姿が描かれている。無理解な家臣に囲まれた苦しみを芥川は、こう表現している。

……彼は、蟻地獄アリノコトに落ちた蟻のやうな、いら立たしい心ココロで、彼の周囲を見まはした。しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理解もない、鈍に萬一を懼おそれてゐる「譜代の臣ハタゴ」ばかりである。「己は苦しんでゐる。が、誰も己の苦しみを察してくれないものがない。」——さう思ふ事が、既に彼には一倍の苦痛であつた。

この修理の孤独と苦しみは、母フクの孤独と苦しみを芥川が察して表現したのではないかと考えられる。

新原家で塾居の生活を続けていたフクの精神状態がどの程度、異常をきたしていたのかは計りかねるが、一説によると発狂というよりも強度のノイローゼとみた方が適当であらうらしい。フクが得二を家の者に抱いて来させ、二階の自分の床の上であやしていたという話や、吉田弥生の実弟英吉郎氏談の、ちょうど障子張をしていて手に剃刀をもっていたフクが「気がいかに刃物というの

は、こういうことをいうんだらうね」と真顔で言ったことなどを考えると、フクが狂気の手前で苦惱していたのではないかと推測されるのである。「忠義」の修理は、このようにも苦しむ。

癡狂——かう云ふ怖れは、修理自身にもあつた。周囲が、それを感じてゐたのは、云ふまでもない。修理は勿論、この周囲の持つてゐる怖れには反感を抱いてゐる。

案外、フクは「狂人」扱いされながら、その手前でひどく苦しめられていたのではないかと気がさしてくるのである。又、この修理の怖れは、芥川自身の怖れでもあつた。

母は狂人非自分自身、という関係が成り立つのである。しかも、ここで「狂人」というのは「弱者」である。芥川は大正五年十月十一日付の井川恭宛書簡で次のように述べている。

ぼくは安價な良心を持つてゐるブルジョアより かはいい道樂者の方によつほど同情するやうになつた 弱いものほどかはいいね 弱いのを知つてゐるものほど謙遜だね

芥川は弱者には親近感を覚え、擁護している。それは、自分が純粋であるとするため真実を見極めようとするため周囲から理解されず冷遇された孤独な者という意識があつたためではないだろうか。自分も無理解な世間の中では弱者であるという認識があつたのである。だから、新原家の中で孤立した弱者のフクを自分と同質の者と見ていたのではないだろうか。「狂人」という弱者のフクを。

新原家の人々のフクに対する扱いを芥川は、内心、無情なものと感じていたのではないだろうか。後妻フユ・異母弟得二の入籍と芥川自身の養子縁組と関連させて「忠義」を更に見てゆこう。

修理の病状に理解のない家臣の中でも、家老の前島林右衛門は事あるごと忠諫を進めていた。そして、忠諫の効がないと知ると修理を押し込め隠居にして、板倉一族の中から養子をむかえることを企てる。このような林右衛門の態度は、修理をますますいらだたせ、狂気へと追いこんでゆく。ここで林右衛門の描かれ方を見てもみよう。

林右衛門は、家老と云つても、實は本家の板倉式部（いわたまきしべ）から、附人として來てゐるので、修理も彼には、日頃から一目置いてゐた。これは殆病苦（びやくこ）と云ふものの經驗（けいけん）のない、緒ら顔の大男で、文武（ぶんぶ）の兩道に秀でてゐる點では、家中（かみうち）の侍で、彼の右に出るものは、幾人（いくにん）もない。

林右衛門は圧倒的強者の立場にいたのである。ここに、フクをめぐる人々、父敏三、後妻フユなどの影が感じられるのである。さて、この強者・林右衛門はどう考えて修理を押し込め隠居しようとしたのだろうか。

何よりも先、「家」である。（林右衛門はかう思つた。）（當主）は「家」の前に、犠牲にしなければならぬ。殊に、板倉本家は、乃祖板倉四郎左衛門勝重以來未嘗、恥（かたじけなく）を受けた事のない名家である。

……中略

その名家に、萬一汚辱（おとし）を蒙らせるやうな事があつたならば、どうしよう。臣子の分（かた）として、九原の下、板倉家累代の父祖に見ゆべき顔（かほ）は、どこにもない。

「主」を無視した「家」重視の考えが、そこにはあるが、よく読むと「家」を守らねば自分の顔が立たないというエゴイズムも垣間見られるのである。

更に、芥川の養子縁組と後妻フクの入籍、異母弟得二との関係を見ると、「忠義」の林右衛門の企てには、芥川の新原家に対する反発が読みとれる。この点については、佐藤美加氏「芥川龍之介の『忠義』に内在するもの」（注）による、また他作品の「保吉の手帳から」の「わん」に書かれた長子権を焼肉のために捨てたエサウからも解釈できる。

龍之介とフクは、得二とフユに新原家での居場所を横から取られた形になるのである。

その中で特に重要であるのが「忠義」における「時鳥」の扱われ方についての考察である。

佐藤氏は、「忠義」中、三ヶ所の「時鳥」が書かれた部分を挙げられ、「時鳥」が佐渡守（林右衛門が養子をもらおうとした板倉佐渡守であり、修理にとつては自分の家に乗つとる相手である。）と同じに見えたことを暗示する点を指摘された。そして、撥帳（はくちやう）という時鳥の性質から、家とりの暗示を芥川が示しているこ

とを指摘されている。

……このように結果的に鶯の巢を乗取ってしまった時鳥の生想を思うと、「忠義」において発狂した修理が時鳥のことを口走るといふことは、頗る意味深いものがあると言わねばならない。

……中略

ここで見逃してはならないのは、修理にとって時鳥が必然性を持つていたことである。また同時に、芥川自身にとつてもこの時鳥がある重要な意義を荷わされていたのではないかと思われる。

……中略

或は事実時鳥は芥川にとつて不愉快な存在であり、その不愉快さを取って替いたのが「忠義」だったのかもしれない。

修理は、結局、刃傷事件（紋所が似ていたため板倉佐渡守と間違えて細川越中守を死なせてしまう、但、その後には修理は発狂している）ので、その間違ひには気づいていない。）を起こし切腹となる。

この悲惨な修理の姿は、母フク・芥川自身と重なる。その修理は、出仕前に「時鳥」のことを口にする。又、佐藤氏の説を引用させていただと、

修理の時鳥が鶯の巢を盗むと言った言葉と、前島林右衛門が家を横領しようとする野心をもっているかもしれないという

彼の危惧は無関係ではあるまい。修理は自家を鶯の巢に、時鳥を佐渡守側の人間に見立て、佐渡守を打ち果たすことを目標論んで出仕を決意したのではないだろうか。

私は佐藤氏の説に同意したい。

佐渡守を打ち果たそうとする修理には、母フクへの同情と父への反感が込められているのであろう。

又、芥川の修理に対する目差しには、同胞者を見るような優しさが滲んでいる。それは、修理の唯一の理解者である田中宇左衛門の心として表現されている。

自分は、「家」の利害だけを計るには、餘りに「主」に親しみすぎてゐる。「家」の爲に、唯、「家」と云ふ名の爲めに、どうして、現在の「主」を無理に隠居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓こそ持たないもの、幼少の修理と變りがない。自分が繪解きをした繪本、自分が手をとつて習はせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた紙鴛——さう云ふ物も、まざまざと、自分の記憶には残つてゐる。……

修理非母芥川自身と考えてみれば、母に対して同情がわき、実父・叔母フク・異母弟二などに対しては反発がおこる。しかし、それは表に出せない鬱屈した感情である。これが「忠義」に現われたのではないだろうか。

(二) 異母弟得二への反感と愛情

(一)で述べた事情により、芥川と異母弟得二の關係は微妙なものであった。

「兄弟二人の感情としてまずあるのは、反発であろう。『或阿呆の一生』(昭和二年十月『改造』掲載)の三十二喧嘩には、異母弟と取り組み合いの喧嘩をしたことが書いてある。そして、二人の心情を「彼の弟は彼の爲に壓迫を受け易いのに違ひなかつた。同時に又彼も彼の弟の爲に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。」と語る。出来の良すぎる兄と弟というだけなら、一般的である。しかし、芥川と得二の場合、家庭環境の複雑さから二人の間には、不安定な気持ち(血のつながりに頼れないしこり)があつたのである。

得二について少し述べると、その性格は父に似た激しい部分を持ち、何かと家族を困らせていたらしい。何かにつけ、深謀遠慮な芥川とは対照的であつたと思われる。そのためお互いが心におだかまりを抱いたままうちとけることが少なかつたのではないだろうか。この微妙な關係は「お律と子等と」(大正九年十一月「中央公論」)の中に描かれている。この作品は、それまでの歴史小説から、身近な所に題材をとる現代小説に転換を試み始めた頃、執筆された。

お律には、三人の子がいる。お律は商家へ後妻として嫁いだの

で、この三人の子等(お絹・慎太郎・洋一)は皆夫々に片親違ひの兄弟である。お絹は先妻の子であり、慎太郎はお律の連れ子であつた。話の筋は、これらの子を持つお律が十二指腸潰瘍になり、腹膜炎に悪化した結果、息をひきとるまでの家の中の様子を描写しているのみである。

主に兄弟達のお律への態度が淡々と書かれているだけであるが、ここで取りあげたいのは、兄・慎太郎と弟・洋一の気持ち・お絹の実母のない気持ちを描いた箇所である。

まず、慎太郎と洋一の關係は、洋一の目を通して次のように語られる。

……すると彼の心には、この春以來顔を見ない、彼には父が違つてゐる、兄の事が浮かんで來た。彼には父が違つてゐる、

——しかしその爲に洋一は、一度でも兄に對する情が、世間普通の兄弟に變つてゐると思つた事はなかつた。いや、母が兄をつれて再縁したと云ふ事さへ、彼が知るやうになつたのは、割合に新しい事だつた。

しかし、作者がこう書けば書くほど読者には、疑問がおこるのである。そして、芥川自身も、続けて、洋一が兄と自分の母を見る目が違つたと氣付く場面を描き、兄弟の間に違和感をもたせている。

又、お絹と慎太郎にもこんな記憶がある。

——まだ小學校にみた時分、父が或日慎太郎に、新しい帽子

を買つて来た事があつた。…略…するとそれを見た姉のお絹が、來月は長唄のお淡ひがあるから、今度は自分にも若物を一つ、拵へてくれると云ひ出した。父はにやにや笑つたぎり、全然その言葉に取り合はなかつた。姉はすぐ怒り出した。

お絹は父に毒口を利いて、父は苦い顔をした。このとき、お絹は、「慎ちゃんばかり可愛がる、どうせ、私は馬鹿です、私のお母さんは馬鹿だつたから。」というような事を言う。この争いを見ていた慎太郎は、何故かお絹にくつてかかる。

「どうせ私は莫迦ですよ。慎ちゃんのやうな利口ぢやありません。私のお母さんは莫迦だつたんですから、——」

慎太郎は蒼い顔をした侯、このいさかいを眺めてゐた。が、姉がかう泣き聲を張り上げると、彼は黙つて壘の上の花簪を掴むが早い、びりびりその花びらをむしり始めた。……中略

何時か泣いてゐた慎太郎は、菊の花びらが皆なくなるまで、剛情に姉と一本の花簪を奪ひ合つた。しかし頭の何処かには、實母のない姉の心もちが不思議な位鮮に映つてゐるやうな気がしながら。——

お絹・慎太郎・洋一の兄弟や親に対する不安感（何かの拍子に争うと、わだかまりが残る「血のつながり」というより、どこか、不安定な感情）は、芥川自身のものであつたと思われる。

「母」に絡んだ問題で、得二にどうしても反感を抱かずにはいら

れない芥川は、何とかこの問題を解決しようとした。その試みが「偷盗」なのである。

「偷盗」は、大正六年四月「中央公論」に発表された。（後に後半部が七月号に掲載される。）

「今昔物語」卷二十九の「不_レ被_レ知_レ人女盗人語第三」・「筑後前司源忠理家入盗人語第十二」などを典拠とする王朝物の作品である。

沙金_{（しやうきん）}という美女をめぐる太郎・次郎の兄弟が反目しあい、互いに相手を殺そうとまでするが、最後に「血のつながり」や「肉親の情」を思い出し和解するというのがメインプロットである。

「偷盗」は芥川が自己の抱える問題の解決を求めて創作したものとされる。「偷盗」の中で芥川は「救済」、芥川の見た人間の持つエゴからの救済を発見しようとしていたのである。ただ、このテーマが消化しきれず、作品としても芥川の救済に対する考え方自体にしても不完全さを示す失敗作とされる。芥川自身も大正六年三月二十九日付松岡譲宛書簡で、次のように述べて「偷盗」を失敗作と認めている。

「偷盗」なんぞヒドイもんだよ安い繪双紙みたいなもんだ……中略……支離滅裂だ熱のある時天井の木目が大理石のやうに見えたが今はやつぱり唯木目にしか見えない「偷盗」も昔く前と書いた後とではその位の差がある僕の書いたもんだや

一番悪いよ……略

作者自身の扱いなどから長年未完成の作品として看過されてきた【偷盗】であるが、近年再評価の論が相次いでいる。その中で、海老井英次氏の説として【偷盗】は【羅生門】の「黒洞々たる夜」に消えた下人の救済をモチーフとした作品であるというのがある。海老井氏は、芥川の創作ノート「There is some thing in the darkness」, says the elder brother in the Gale of Karyo」に注目しつつも芥川は結局、その something、闇の中にある何かを救いを掴みきれず、太郎と次郎の「兄弟愛」に収斂されたのは通俗に堕したものだ、とされる。

【偷盗】は darkness の中に something を求めたものであるという氏の説には、同感であるが、その表現として「兄弟愛」を持つてきたのは通俗的であるという点について同意できない。

【偷盗】の問題となる太郎が次郎を野犬の群から助ける場面を引用しよう。

すると忽ち又、彼の唇を銜いて、なつかしい語が、溢れて来た。「弟」である。……略……この語の前には、一切の分別が眼底を拂つて、消えてしまふ。……略……彼は空も見なかつた。路も見なかつた。月は猶更眼にはいらなかつた。唯見たのは、限らない夜である。夜に似た愛憎の深みである。

海老井氏は、この太郎の心理・感情を感傷的とされる。確かに表現としては、感傷的であると言える。しかし、芥川が「救済」に「兄弟愛」を持つてきたことは、今迄述べてきた得二のこ

とを考えると、単なる感傷だけではないと思われる。

そこには、憎しみをも超えることの可能な「血のつながり」への芥川の憧れと、それを持たない芥川に唯一出来る、意志によって愛を持つとする痛々しい挑戦があるのである。大正四年四月二十三日付山本喜譽司宛書簡で芥川は「私は今心から謙遜に愛を求めてみます……略……如何に血族の關係が稀薄なものであるか如何にイゴイズムを離れた愛が存在しないか……略……私がどれだけ「人間らしく」生きられるかそれは全くわかりません」と述べる。

【偷盗】の太郎・次郎の兄弟愛は一見、通俗的であるが、そこに普遍的で純粋な愛を求める芥川の思いがこめられているのである。

「血のつながり」への憧れからさらにそれを超えた意志的な「愛」というものについて、『捨児』（大正九年八月「新潮」掲載）が分かりやすい。

捨児であつた主人公勇之助は、明治二十二年浅草永住町の信行寺住職にひろわれ育てられる。明治二十七年に勇之助の母と名乗る女があらわれて、勇之助をひきとる。その母が亡くなる前年に勇之助は、母が実の母でなく嘘をついて自分を引きとり、女手一つで育ててくれたことを知る。それ以来、勇之介にとって母は母以上のものになったと彼は聞き手の「私」に言う。「私」は、そんな彼を「子以上の子」であると認める。

以上が「捨尼」の概略である。一応、本文引用をしておく。

……實際私の母に對する情も、子でないことを知つた後一轉化を來したのは事實です。」

「と云ふのはどう云ふ意味ですか。」

私はちつと客の眼を見た。

「前よりも一層なつかしく思ふやうになつたのです。その秘密を知つて以來、母は捨尼の私には、母以上の人間になりましたから。」

客はしんみりと返事をした。恰も彼自身以上上の人間だつた事も知らないやうに。

ここに、養家の育ての母のこと、芥川の捨子体験とのオーバーラップがあることはもちろんだが、別な見方をすれば、「血のつながり」に頼らない純粹な「愛情」で結ばれた人間関係を芥川が求めていたことの証が読みとれるのである。

注

注1 入籍は明治十八年三月二十六日である。

注2・3 「芥川龍之介の父」(森啓祐著・桜楓社・昭和四十九年二月)

p 41・p 72参照

注4 「解釈」昭和六十二年七月号

注5 佐藤氏の引用部分を次に掲す。

……「黒潮」所載の初出本によって次に掲げる。

いや、唯一度、小雨のふる日に、時鳥の啼く聲を聞いて、「あれは鶯の巢をぬすむさうぢやな。」とつぶやいた事がある。(三八頁)
が、男は、物々しい殿中の騒ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答へらしい答へをしない。側々口を開けば、唯、時鳥の事を云ふ(四六頁) その證據には、大目付の前へ出て、修理は、時鳥がどうやら、云うてゐたさうではないか。されば、時鳥ぢやと思つて、斬つたのかも知れぬ(四八頁)

注6

家紋について、板倉家九曜巴と細川家九曜の記述を「日本紋章學」(沼田頼輔著・明治書院・大正十五年三月)より引用しておく。又、家紋図は「姓氏家系大辞典」(太田充編・角川書店)による。

九曜紋の形状は、一個の圓形を中心として、その周圍に八個の圓形を圓狀に繞らせるものにして、中央の圓形は、比較的大なるものを普通とす。而して周圍の圓は相互接近するも、稀には特に隔離せるものあり。細川氏の九曜紋の如き是なり。因つてこれを細川九曜といふ。元來、細川氏はもと普通の九曜紋を用ゐるしも、細川宗孝の時、即ち延享四年八月十五日、板倉修理勝談のために、この紋章の板倉勝清が九曜巴に類似せるより、これと誤認せられて殺されたりしかば、これより右の如く九曜を改造せしといふ。



日本紋章学 明治書院 沼田頼輔著
大正十五年三月

注7 「芥川龍之介の父」 P.115 P.116 参照
注8 「芥川龍之介事典」(菊地弘・久保田芳太郎・関口安義・編・明治書院・昭和六十年十二月) P.336 参照

注9 「芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―」(海老井英次著・桜楓社・昭和六十三年二月) 参照

注10 「日本語日本文学」(第十三輯・中華民國七十六年十月) 掲載・赤羽学先生「芥川龍之介における模倣と独創」の(2)部分参照

〈テキスト〉

芥川龍之介全集 岩波書店 一九七八年

〈参考文献〉

芥川龍之介 河出書房新社 鷗只雄編

一九九二年六月

芥川龍之介事典 明治書院 菊地弘・久保田芳太郎・関口安義・編

昭和六十年十二月

芥川龍之介の父 桜楓社 森啓祐著

昭和四十九年二月

芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―

明治書院 海老井英次著

昭和六十三年二月

〈芥川〉とよばれた藝術家

有精堂 石川透著

一九九二年八月

(岡山大学大学院文学研究科)